



## 5 プロジェクトの成果

今回のプロジェクトは、大阪教育大学のある柏原市の伝統産業である河内木綿について知ってもらうために、河内木綿を使ったトートバッグにシルクスクリーン体験をしてもらうというワークショップであった。本プロジェクトは、シルクスクリーン体験を通して河内木綿を「使って知る」機会を提供し、地域素材の価値を身体的・実感的に理解させることに成功した。河内木綿は、江戸期から大阪・河内地域で生産され、厚手で丈夫、生活の中で繰り返し使われてきた実用的な布であるが、今日ではその存在や特性を具体的に体験する機会は少ない。本ワークショップでは、トートバッグという現代的で日常性の高いアイテムに用いることで、河内木綿を過去の遺産としてではなく、現在の生活とも接続可能な素材として提示することができた。

また、河内木綿について参加者に説明するにあたり、企画者自身もその歴史的背景や生産地域、織りの特徴、生活用品としての用途などを事前に調べ、理解を深める必要があった。そこで木綿を育てる人に話を聞いたり、実際に栽培したりした。それに加えて様々な資料を読んだり、八尾市立歴史民俗資料館で学んだりした。その過程で、河内木綿が単なる「布」ではなく、地域の産業や暮らし、気候風土と密接に結びついた文化的存在であることを再認識した。特に、丈夫さや吸湿性といった素材特性が、日常生活の要求から生まれたものである点は、制作体験と結びつけて説明することで、より説得力をもって伝えることができた。

制作体験を先行させ、その後に素材の説明を行う構成としたことで、参加者は自らが刷った際の手触りやインクの乗り方と、河内木綿の特性とを結びつけながら理解することができた。このように、制作と学習を一体化させることで、知識の一方的な伝達ではなく、体験を基盤とした主体的な理解を促す体験型学習のモデルを示すことができた点も、本プロジェクトの重要な成果である。

ワークショップの参加人数は神霜祭は三日間で 64 人、かしわら芸術祭は二日間で 41 人の計 105 人です。











